

小川佳夫の作品の第一印象は「原初の文字」だった。なぜ原初の文字か。それは声に近いからだ。声は息とともに発せられる。それを目に見えるものにしていく。息遣いが小川の作品から感じられる。さらに筆者が声を感じた点は色彩にある。声色という言葉があるとおりに、声には「色」がある。筆者は小川の作品を見て、ヘルダリンによる『アンティゴネー』の翻訳の一文を想起する。

「お姉様は言葉を紅に染めているような気がします」

祖国に弓を引く大罪を犯し殺された兄を、アンティゴネーは国の掟を破り、葬ろうとする。それを察知した妹イスメーネーの言葉である。通例「お姉さまは何か暗い、何かゆゆしい提案を心に秘めておいでのようです」と訳されている。ヘルダリンの訳は常軌を逸している印象を与える。この翻訳が成立した1803年、詩人はすでに精神を病んでいた。このような突飛な翻訳は狂気の産物としてかたづけられていた。同時代のシラーは呵呵大笑したという。しかし、現代では、原典に対する鋭い洞察力、深層における理解力のなせる技としてこの上なく称賛されている。というのも「ゆゆしい」と訳される「カルカイノース」という言葉には紫の染料のもととなる紫カサガイをさす古代の埋もれた言葉「カルケー」が隠れているからだ(ジョージ・スタイナー『アンティゴネーの変貌』)。アンティゴネーの、国の掟を破ろうとする意志はイスメーネーに赤い色として映る。そして彼女の心をも「紅に染めて」いく。これは言葉の力である。太古の言葉は文字通り色彩を帯び、それに触れたものの心を染め上げていく。詩人は言葉の古層にさかのぼり、言葉の持つ原初の力を取り戻そうとした。

それと同種のことを筆者は小川の作品から感じた次第である。彼の作品は虚空を切り裂く色彩を帯びた響きである。太古の言葉さながら、受け止めた者の内面に燃え広がっていく。そもそも言葉により色が想起されるのはなぜなのか。それは言葉が概念の伝達以上の力を持っている証しである。むしろ

マジカルな力こそ言葉の本質である。その大本には「声」の働きがある。肉声は命を帯びたものであり、文字はその力を視覚化できる。古今東西の護符や呪文の文字はその例だ。これらは「原初の文字」である。小川は現代において「原初の文字」を実践している。

小川は原初に遡行する。単色の背景から浮かび上がる形象はなにか途轍もないものが画面に残した痕跡の様だ。不穏な何かを感じさせる。この力はどこから来るのか。おそらく画家は抗しがたい何者かと相対峙している。それは魅惑的で危険なものである。なぜならば対象との距離がないからだ。画家は何ものかに心身をあげ放ち、ひとつの「声」となる。その「声」は自分のものであって自分ではない。しかし、「声」となることで距離が生まれ対象化できる。彼のストロークは「声」の痕跡なのだ。だが、いったい誰の「声」なのか。

正体不明の何かは、画家が気づくまで幾たびも襲ってくる。それは予感と不思議な高揚感と恐怖を伴う「声なき声」だ。対象化できなければ、まるで雷に打たれたように耐え切れず身は滅んでしまう。それを避けるにはかのものを受け止め対象化するしかないのだ。そのため画家は描く。

「声なき声」は何かを伝えようとしている。言葉以前の言葉は意味を超え出ている。しかし、ある種の「傾き」はわかる。小川は旧約聖書の『詩篇』の言葉でそれをとらえようとする。彼の新作のタイトルの多くは『詩篇』から取られたものだ。これは、根源的なものにとらわれた者が自身の体験を言語化して正気を保つべく聖書の言葉を口にするのと似ている。小川は根源的なものとの親密度が高いのである。

小川は何ものと出会ったのか。その得体のしれぬものは何を伝えようとしているのか。そのことを考えるにあたり筆者は再びヘルダリンの詩句を思い起す。

「根源近くに住む者はその場を去りがたい」（「漂泊」）。詩人は、獣のようなおらびと天なるものの妙なる歌を同時に聞いた。それは彼の発した「声」でもある。根源世界において言葉も臨界に達し、失われる。しかし、詩人はしるしとエコーに言及する（「ムネモシュネ」）。言葉を失った先にはこのふたつが残される。しるしとは「原初の文字」、エコーとは「声」のことではないだろうか。死すべき者である私たちにはこのふたつしかない。しかし、エコー

は天なるものと共鳴する「声」であり、かのものと共有している。「原初の文字」がエコーを変換しうるならば、「しるし」もまた共有可能である。故に、このふたつによりかのものとの原初の記憶にさかのぼれる。そう詩人は「ムネモシュネ」で語っているように筆者には思える。だが、この詩の要は死すべきもののほうが天なるものよりも早く深淵に到達すると明言している点である。天なるものも完全ではないのだ。彼らには死がない、つまり時間の流れがない。かのものは、私たち死すべきものしか知りえないことを知るべく私たちに働きかけてくる。それが「声なき声」となる。では、私たちしか知りえないこととは何か。それは限りある者が時間の流れの中に留まるものを打ち建てることである。これは作品化に他ならない。その最小限の素材が「声」と「原初の文字」なのである。私たちの「声」も、それを変換した「原初の文字」も彼らにはない要素であり、それゆえ、共有したいと願っている。そのことをかのものは伝えてくる。ひとつとなることにより天なるものもまた時間の流れに触れる。それがエコーである。エコーは自分の声であって、自分の声ではない。天なるものの歌として響いている。そして天なる歌も「原初の文字(しるし)」となって留まる。このような事柄が原初の記憶には含まれる。根源世界には原初の記憶が息づいている。

小川は明らかに根源世界に住まう者である。彼には原初の記憶の自覚がある。そうでなければあのような作品は描けない。小川の作品は、自身が言うように「懐かしくもあり恐れも感じるような原初の記憶」を呼び起こすものなのである。実に謎めいた「しるし」なのだ。小川が相まみえたのは、不死の天なるものであることは確かだ。かのものは小川を介して形を得ようと働きかけ、小川は「声なき声」に耳を傾ける。その結果、類いまれな作品の数々が成就した。

私たち死すべきものが応えることにより、かのものは耳に聞こえ眼に見えるものになる。こうして時空の中に留まる。それは「作品」としての「体」を得ることなのだ。それを果たすべくかのものは創造する魂に働きかける。小川は、かのものの願いを受けて立った。私たちは儂い。しかし声は消えない。声は「原初の文字」となって留まり、かのものの「心」を染め上げていく。